

幼児教育の本質が問われるとき

——一九八三年幼児教育の展望——

秋山 和夫

幼児数の減少と幼児教育界

「幼児教育の本質は何か」といった問いかけや、「保育内容の質を高める」ために、どのようにしたらよいかといったことの検討は、いまに始まったことではない。

これらの問題は、古くして新しい課題であり、永遠に問いつづけられなくてはならない課題であろう。

しかし、これらの問題が今日的な課題として真剣に考えられなければならない理由は、幼児教育の性格や、その方向性がきびしく問われているからである。単なる理念のレベルで、あるいは、理論的な関心にもとづいて行われる検討であれば、それが直ちに実践を規定すること

はない。

ところが今回の場合は、乳幼児人口の減少という事実の中で、幼稚園や保育所の子どもの定員が充足できなかったり、幼稚園や保育所相互の間で、各園が定員をうめるために、園児の獲得競争も行われているという、深刻な事態がその背景にある。少し大げさな言い方をするならば、園そのものの存在がゆさぶられているともいえるのである。

幼稚園や保育所の受け容れ定員数の方が、入園を希望する幼児数を上まわることになれば、親は幼稚園や保育所をかなり自由に選ぶことができる。そのためにも、幼稚園や保育所の保育内容の質が問われることになる。大

きな定員割れをおこさないこと、そのための保育内容の質の向上といったことは、園の経営という現実的な立場からの切実な要請になってきている。

良い保育とは何か

わが子を、良い園に入れて、より良く育てていきたいというのは、親に共通した願いであろう。また、幼稚園、保育所関係者も、より良い保育を行って、子どもたちの全面的な発達を保証してやりたいと願い、そのための努力を続けている。

このように、「より良い保育」を求めている点においては、親も保育者も共通している。しかし、どのような保育がより良い保育であるのかという点になると、親と保育者との間で意見が一致しているわけではない。また、保育者相互の間ですら、その点についての意見の一致は求めにくい。これは、親のエゴイズムが表面にでてくるからだとか、保育者が怠慢だからといった理由によるものではない。

むしろ、良い保育とは何かについての理論的な研究が十分でないからだ、といった方がよいのであろう。理論的な研究は、多くの場合、実験室の中のある特定の観点に立脚した研究であったり、幼児の発達を考えるための前提としての基礎的資料を得るために、ある特定の能力の学習可能性を追求する研究であったりする。

人為的な実験場面での研究、ある特定の能力についての学習の可能性を明らかにするような研究が必要なことは言うまでもない。それと同時に、ボッサード (T.H.S. Bossard) などが提起しているような、場面情況的アプローチ (Situational approach) が研究方法論として取り入れられる必要がある。そこでは、子どもの自然な活動場面で、子どもの興味や意欲をしっかりと把握、子どもの活動の様子を把握することができるからである。また、学習の可能性の追求のみに止まらず、教育の妥当性の面からの研究が、もっと理論的になされる必要がある。こうした研究の中で、子どもにとって望ましい保育とは何か、ということが解明されていくのであろう。

現在では、幼児期における学習の可能性がずっとつきつきと解明されてきている。「0才児でも訓練すれば、これだけのことができるようになる」といった研究や実践が、あたかも、教育の妥当性を示すものであるかの如く、言いはやされている。例えば、零才で泳げるようになることが、乳児にとってどのような意味を持つのか、それがその子どもの発達にとって、どのような影響を及ぼすのかといったことが十分論議されることなく、一般には、物珍らしさで、何か好ましいことではないかといった受け止め方がなされている。これに類した事例は枚挙にいとまがないほどである。

倉橋惣三が、かつて指摘したように、幼児教育は「猿か山雀にでも芸を仕込んで、見物人を驚かす」ためにするものではない。倉橋がしばしば指摘しているように、子どもの「いきいきしさ」「生活の満足」「自発的生活」を保証するためにどうすればよいかという観点で、保育を構築していくことが必要なのである。

今のような状況だからこそ、前に述べたような観点で

の保育を確立し、子どもにとって望ましい保育とは何か、ということを親に説得していく努力が必要であるう。

幼・保一元化

幼・保一元化の是非が、幼児人口の減少という事実のなかで、より真剣に議論されている。保育クーポン制の考え方を提示したある政治家の発言も、この議論に拍車をかけている。

現実には、幼稚園の保育時間の延長の傾向、保育所の幼稚園的運営といった傾向が見られ始めている。幼稚園と保育所が、はからずも現実面で歩み寄っているといえるのである。

幼・保一元化の理念は実現されるべきだと私は考えている。しかし、それを実現するためには、現実的に処理されなければならない問題が山積している。幼稚園の本質、保育所の役割は何であるのか、それらは、子どもにとってどのような場所であることが望ましいのか、とい

った基本的な事柄についての理論的な検討が必要である。さらに、文部省、厚生省に分れた幼児保育についての二元的行政をどうするのか、その他行財政上の問題が山積している。

幼・保の一元化は、子どもの立場に立つてこそその必要が存在するのである。おとなや、園の経営者や行政関係の人々の必要から、あるいは、経済的な理由からす定められるべきものではなからう。現実におすすめられている幼稚園の長時間保育、保育所の幼稚園化といったものは、誰の必要に基づいてすすめられているのであろうか。

小学校との関連

幼稚園・保育所を経て、小学校に入学する児童は、ほぼ九〇パーセントに達している。このような現実の中では、幼稚園・保育所の保育内容が、小学校教育とのかかわりで問題にされることが多くなってくる。小学校入学準備のための保育内容というものが、あるのかどうか。

また、最近の子どもの発達加速化現象とのからみで、幼・保の保育内容が問題にされている。

この場合に大切なことは、あくまでも子どもの立場に立ち、幼児教育の本質をふまえた検討がなされることである。

おわりに

これまでに見たように、幼児教育の世界には解決を迫られる多くの難問が山積している。しかも、これらは、幼児教育の本質と深くかかわるものばかりである。このような状況の中で、倉橋惣三によって策かれた幼児教育の伝統が正しく評価され、その精神が保育界の指導力となることが望まれる。

一九八三年は幼児教育界にとっては多難な年である。それだけに子どものしあわせを実現するための幼児教育についての研究や実践が、拡がりを持って深められていく必要がある。

(岡山大学)